

この3月、姫路市が主催する和辻哲郎文化賞(一般部門)を受賞した者です。そのとき「神戸新聞」でも記事にしていた。この縁でこの欄にこれから数回、皆さんのお目汚しをすることになりました。お付き合いくださいれば幸いです。

受賞作『私小説千年史―日記文学から近代文学まで』(勉誠出版)は、表題どおり日本に固有な「私小説」を、その成立の近因遠因を日本の文学伝統や日本語の性格にもさかのぼって考察した。私の研究がこんなふうな風土や歴史、文化全体のなかで文学を考えようとしてきたのは、若い頃ずいぶん読んだ和辻哲郎の影響もあったのかと、今度あらためて気づいた。学問への姿勢や方法を学

和辻哲郎との縁

勝又 浩

んだのだろう。授賞式のご挨拶でも話したことだが、私の卒業し、また勤めた法政大学文学部は夏目漱石の門下生たちが中心になって創設したという経緯があった。そのなかに和辻哲郎もいて、その縁で大学には蔵書を収めた「和辻哲郎文庫」もある。だからというわけではないが、ごく自然に和辻哲郎に入って行ける環境のなかにいたことも事実だ。

和辻哲郎は、初めは文学志望だったが東大でも「新思潮」同人だった谷崎潤一郎からの逆説的な影響によって哲学に変えたと言っている。いま思えば、私はずっと哲

随想

学に憧れながら文学をやってきたのかもしれない。今度、姫路文学館のご好意で仁豊野の和辻哲郎生家を初めて訪ねたが、その勢いで、7月には東京練馬から鎌倉に移されている旧和辻邸(川喜多映画記念館内)も見えた。秋には改めて鎌倉東慶寺へお墓参りをしたいと思っている。



かつまた・ひろし 文芸評論家。法政大学文学部名誉教授。1938年

横浜市生まれ。法政大学院博士課程中退。聖徳短期大講師、大正大学文学部教授、法政大学文学部教授を歴任。「私小説千年史―日記文学から近代文学まで」は第28回和辻哲郎文化賞。このほかの著書に「鐘の鳴る丘」世代とアメリカ」など。

仁豊野の和辻哲郎生家を案内していただいたとき、播但線で北へ3駅目の福崎が柳田国男の生地だと教えられて、ちょっと驚いた。筑後川沿いに揃って出た青木繁、坂本繁二郎ではないが、こんな近い所から2人も偉人が出ている事実には、である。柳田国男と和辻哲郎を並べて考えたことはなかったが、やはりその土地に立つてみると分らないことはあるらしい。

三木清のこと

勝又 浩

それ故というわけではないが、若いころ懸命に読んだ哲学者の一人だ。で、私の若書きの一つに三木清論があつて、それは、恩師小田切秀雄に「よく勉強しました、というところだね」と言われてしまったような仕事だったが、結果はともかく、それに取り組んだ頃の気持ちは今も続いているように思う。

三木清は京大卒業後、ドイツ留学で実存主義哲学を学び、「パスカルにおける人間の研究」で登場した。秀才を謳われたが、その後、突然のよう

随想

に左傾して京大への(かつまた・ひろし) 文芸評論家

文芸評論家

1945(昭和20)年5月29日の横浜大空襲のとき、私の一家は西区の戸部町に住んでいた。国民(小)学校1年生だった私は親にはぐれて危うく戦災孤児になるところだったが、その後は横須賀に移住し、高等学校卒業までその地で暮らした。

この戸部町は作家島尾敏雄の生まれたところでもあった。彼は横浜尋常小学校付属幼稚園生とき、ここで関東大震災に遭遇している。その23(大正12)年9月1日はまだ夏休み中で、福島県相馬の母親の生家に滞在、父親も彼らを迎えるために横浜を離れたその日のことだった。お蔭で家族は

島尾敏雄と神戸、横浜

——勝又 浩

みな無事だったが家は全焼した。輸出用絹織物商だった父親は仕事の場を神戸に移して、島尾敏雄も小学校2年で転校、以後52(昭和27)年東京に移るまで神戸が彼の生活の拠点だった。

むろんその間には長崎高等商業学校、続く九州大学時代があり、さらにあの奇跡的な傑作『出発は遂に訪れず』を生むことになった鹿兒島県・奄美加計呂麻島での特攻艇部隊隊長の時代もあった。しかし復員後は真直ぐ神戸に帰り、そこで結婚、作家への道を歩み出している。

52年の上京はむろん作家としての生活に集中するためであったろう。しかし引き移った小岩では、後に名作『死の棘』として描かれることになる不幸な事件、彼の女性問題やそれに端を発した妻の発病、夫婦での入院、一家離散という類いのない過酷な運命に見舞われることになった。

その小岩時代は彼の生涯で唯一、海も港もない土地での生活だった。その不思議な暗合は単なる偶然だろうか、というのが、横浜横須賀育ちの私の、かねての気がかりの一つである。

(かつまた・ひろし)
文芸評論家

随想

雑誌「三田文学」(126号)が遠藤周作特集を組んでいる。今年は没後20年、併せて小説『沈黙』刊行50年になるのだという。今ちょうど神奈川県近代文学館で安岡章太郎展を開催中だが、往年の「第三の新人」たちもこうして次々と歴史に繰り込まれてゆくかのようだ。同時代の作家として代表作は全てリアルタイムで読んできた私としては、自分まで時代の証言者の位置に押しやられてしまうような複雑な気分だ。

安岡展の内覧会の日、何人かの人と立ち話したことであるが、安岡さんは「歴史」に行き着いてそこで『流離譚』とい

遠藤周作をめぐって

——勝又 浩

う大きな仕事を成就したし、遠藤さんには初めから「神」の問題があつて、デビュー当時の軽侮も籠めて言われた「第三の新人」という枠を遥かに越えて共に大きな存在となったことは疑いない。藤自身は、もともとは母親を悲しませなかったための受洗だったと書いている。

知られるように遠藤周作はカトリック信徒として日本の精神風土と格闘し続けた人だが、彼が入信したのは1935(昭和10)年、12歳の時だった。離婚して2人の子を連れて旧満州から故郷神戸に戻ってきた母親が姉に感化され入信したのが始まりだったようだ。遠

随想

文芸評論家

(かつまた・ひろし)

この11月14日、徳島県三好市で「富士正晴全国同人雑誌賞」の授賞式がある。当日は3人の審査員（作家の津本陽さん、ご高齢のため欠席）のうちの作家吉村萬吉さんと私とが、四国大学の佐々木義登先生の司会で記念の文学対談をする予定である。これらの詳細は三好市のホームページに出ているようから、興味ある方はそちらを見ていただければ幸いである。

この賞に冠せられている富士正晴という人は『帝国軍隊に於ける学習・序』などで知られた小説家だが、もう一つ大事な仕事に、今も続いている同人雑誌「VIKIN

富士正晴全国同人雑誌賞のこと

——勝又 浩

G「1947（昭和22）年創刊」がある。この雑誌からは、たとえば前に紹介した島尾敏雄などたくさん作家が世に出ているのだ。彼は旧制の神戸三中卒業だが、戦後は大阪府茨木市に住んで、竹林の隠者などと言われた。いま中央図書館に記念室がある。

それとは別に彼の生家跡に記念碑を持つ三好市は、彼を記念した、全国でも珍しい同人雑誌賞を創設した。3年に1度の公募からの選考だが、今年はその6回目になる。ちなみに前回、第5回（2

随想

013年）では「姫路文学」（井上久男氏主宰）が特別賞を受賞している。ご存じの方も多いであろうが、同誌は最近第130号を出した、地域誌と言ってもよい充実した文芸誌だ。受賞はむしろ遅きに失した感もないではないが、むしろ、ないよりは良かった。

審査員に回されてくる候補誌がどんな基準で選ばれているのか聞きもしたが、姫路、神戸には私の知る範囲でも他にも有力な同人雑誌が幾つもあるから、これからさらにも回ってゆくのだろうと期待している。

（かつまた・ひろし

文芸評論家）

本紙にも報じられていたが、去る9月14日、「淡路島文学」の主筆、北原文雄さんが急逝された。71歳とはいかにも若かった。会えば地域の文化活動に忙殺される身を嘆いていたが、それは私が話の矛先を彼に期待している小説に向けてるからでもあった。淡路島に関わる歴史小説など、まだ実現していないテーマを幾つも聞いていたからだ。

彼とは、会合などの後2人だけになったようなときは自然に同人雑誌が話題になったが、そうしたときいつも私が言ったことの一つに、同人雑誌

日本文化としての同人雑誌

—— 勝又 浩

は日本独自の文化だからね、という一条があった。日本では高校生でも知っている同人雑誌という制度、それはほとんどの人が意識もしていないが、実は世界でも日本だけが持つ特異な文化なのだ。たとえば「文学界」の同人雑誌評を20年余務めた故小松伸六さん、彼は大学では独文の先生だったが、ドイツに行ったとき同人雑誌というものが通じない、理解されなくて驚いたと書いている。ヨーロッパでは、個人が雑誌を出すことはあっても、集まって共同で発表の場を作るといようなことは考えられないのだと言っ。

ではなぜ日本にこういう制度ができ、広く受け入れられているのか。それは要するに短歌俳句の結社の伝統、もつと大きく言うところの歌壇や歌合せ、そうした「参加型文芸」の伝統を持つ国が、近代になって小説の世界にもすんなりと入り込んだからなのである。彼とはこんな話ができるのだが…。

随想

(かつまた・ひろし) 文芸評論家

前回は同人雑誌について書いたから、やはり日本独自の文化である「私小説」にも触れておこう。日本では全国に小説教室の類が盛んだが、「こんな国、民族が、他に世界のどこにあるだろう？あるまい」と私は思う」と批評家の故秋山駿が書いている（『私小説という人生』）。そして、こんなふうにも誰もが小説を書いたり書くことするのは、日本には私小説があるから、「私小説のおかげである」とも付け加えている。

まことにその通り、自分の体験を基に工夫加工すれば小説になる（『私小説』、そういう一般認

私小説について

——勝又 浩

識のお陰で、日本は世界でも珍しい小説家大国なのである。そしてそれは、日本では誰もが歌人であり俳人であるという現象と根は同じなのだ。

言い換えると、短歌俳句、そして小説が共通した文学観の上に成り立っているのだが、その文学観とは写生と心境である。短歌俳句を始めると、まず写生を学ぶことになる。次にその写生のなかに作者の心境を込めたり隠したり、つまり言わぬ方が反って深い心境が表れたりする、その機微を学ぶことになる。そうして、その表れてしまう心境はどうして作るのかとなり、それは日々の生活のなかで磨いてゆくのだ、ということになる。

こうして、歌も俳句も小説も、日本では求道的な性格を持つことになり、それがもう一つの、日本文学の性格である。明治になって西洋のノベルというものが入ってきて、日本人はそれを従来はなかった小説として受け入れた。しかし、それから半世紀かけて大正中期、伝統ある短歌俳句の文学観とも齟齬抵触しない私小説として作り直したのである。

（かつまた・ひろし 文芸評論家）

随想

早くも最終回になりましたが、やはり神戸ゆかりの人で母校の名物教授、近藤忠義先生のことを書いておきたい。教わったのは先生晩年の数年間だが、授業が始まるのは5月の連休が明けてからだし、祇園祭の間は休校と決まっていた。現代ではどうても許されないが、当時はそれでも通ったばかりではない、代々熱烈な信奉者がいて、ゼミなどはほとんど彼らの主導による自主授業でいつも独特な熱気があった。

先生は神戸に生れ、神戸一中、岡山六高を経て東大国文に進み、近世文学を専攻した。後、国文学研究史では「歴史社会

近藤忠義先生のこと

——勝又 浩

学派」と呼ばれる学風を樹立したが、官憲に睨まれて最初の著書『日本文学原論』は恩師藤村作の名で出さねばならなかった。そんな活動のために1944（昭和19）年には治安維持法によって拘留、敗戦まで獄中生活を送った。戦後は数々の進歩的な文学運動に関わったが、封建思想が批判されることの多かった歌舞伎については民族文学・芸能として終始擁護者だった。

先生は76（同51）年、74歳で亡くなられたが、しばらくして、われわれ卒業生の間には、宮子夫

人が「チューリップ」裁判で勝ったという噂が伝わってきた。今も愛されている童謡「コヒノボリ」と「チューリップ」、その歌詞は近藤夫人宮子さんが31（同6）年、公募に応じたものだが、長い間作者不明とされてきた。宮子さんはそれでよいとしていたのだが、ある時からさる音楽教育界のボスの作詞だと公称されるようになった。耐えかねた宮子さんが息子たちと諮って裁判に訴えた。噂を聞いていた近藤先生の教え子たちがみな喜んだというわけだ。

（かつまた・ひろし）

文芸評論家

随想